

高木史朗さん

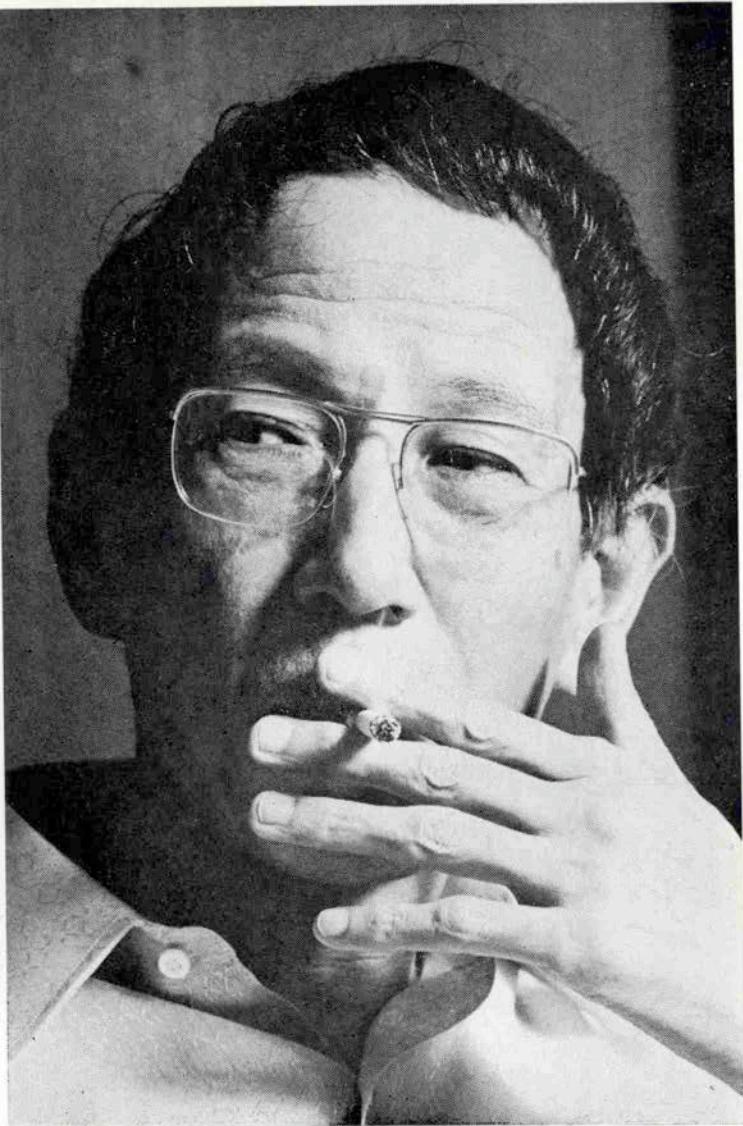
演出家

# 夢の美女を育てた 宝塚の四十年

PEOPLE OF KOBE 〈6〉

文・野口武彦  
〈神戸大学文学部助教授〉

▶高木史朗さん



はじめてこの町を訪れる者にとつては不思議な印象を与える町である。芦屋の岩園からまつすぐに西宮北部へ、甲山を南に見ながらゴルフ場をへて逆瀬川に出る。風致地区に指定されている一帯の青松と磊々たる白い岩頭のみごとの色の調和。満開の山つじ。風にみごとな房を揺する白藤。わたしの宝塚へのアプローチはまず快適にはじまった。



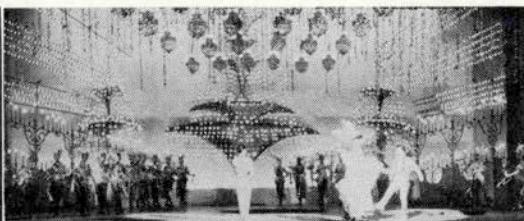
神戸出身のトップスター鳳蘭と筆者

天然の風光もたしかに明媚である。しかしこの町には美しい風物の上にもうひとつ人工的な幻想の伽藍が高く聳えていて、一種の奇怪な現実感がいたるところに溢れている。街路を歩くヅカ・ファンの服装がそうだし、ふらりと入った喫茶店の装飾も一風変っている。嬌声と悲鳴を後に残して遊園地を疾駆するジェット・コースター。イカルスの夢を百円玉いくつかで安価に叶えてくれる巨大な空中観覧車。そして今までもなく、ふくらみひろがる白日夢の同心円の中央には、

宝塚歌劇場のドームがある。

秋には金木犀の芳香が町中にただようという逆瀬川の住宅地の光あふれる一画に、高木史朗氏のお宅があつた。大正四年（一九一五）の生まれというから、今年で六十周年を迎える宝塚歌劇の発祥の年、大正三年（一九一四）とほぼ時を同じうしていることになる。二十二歳のときに関西学院大学を出て、すぐに宝塚に入団してから今年でほぼ四十年、その間どれだけの美女大スターが高木氏の膝下から育つていったかは枚挙にいとまがない。淡島千景・乙羽信子・越路吹雪、八千草薙。そしてぐっと若いところでは、真帆しぶきから現在活躍中の鳳蘭。主だつた顔ぶれを数え上げてみれば、これはかならずしも宝塚ファンでなくとも、思い半ばにすぎるものがあるというべきだろう。

正直に告白しておかなくてはならないが、わたしはこの宝塚歌劇なるものの舞台を一度も見る機会に恵まれていない。いい年をした男がいまさら少女歌劇でもあるまい、という羞恥ずかしさがつい先に立つのである。だから歌劇場の観客席はさしつめ年若い女性たちだけでいっぱい、と思いきや、六対四ないしは七対三の割合で客席は男性ファンにも確保されているのだそうである。観客には二種類の層がある。一



芸術祭文部大臣賞を受賞した「華麗なる千拍子」

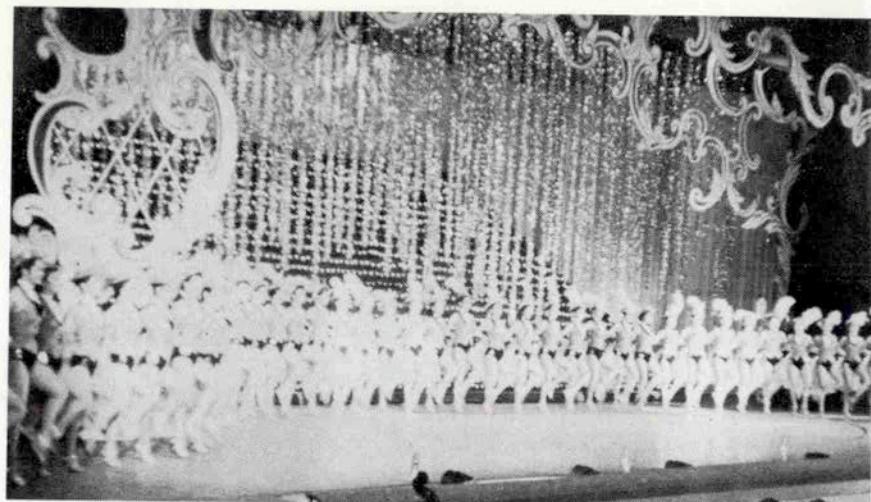


つはまだ少女雑誌に読みふける年頃の、中学・高校の夢見る乙女たちのグループ。もう一つは、その少女たちが妻となり母となり祖母となつて、親子数代が家族ぐるみで出かけてくるファンの肩。男性諸氏もそれに便乗して、というよりもそれを口実にして、歌劇場にやつて来る。現職の大臣も加わった「愛宝会」・「すみれ会」など、の男性ファンの会もあるというから、宝塚歌劇愛好家の勢力はかな

り根強いといわねばなるまい。

レビューオペレッタ、ミュージカルはどこの国にでもあるが、女ばかりの歌劇団は世界にまず類例がない。もしも男がまじっていたら五十年も長続きはしなかつたでしようね、と高木氏は述懐する。次から次へと新しいスターが生まれ出る。その新陳代謝の早さが宝塚歌劇の生命力なのである。それにもうひとつ観客の少女たちの新陳代謝。その二つがあいまつて、タカラヅカの永遠の若さが保たれる。もともとそれは大正初期の帝劇オペラや浅草オペラを見本にして出発したものだが、当時の帝劇女優養成所や三越唱歌隊からヒントを得て、女ばかりの歌劇団を発案したのが創始者小林一三氏のアイデアだつたという。大正初年といえば、明治以来の西欧風モダニズムが、いわば大衆文化のかたちで定着した時代である。洋楽教育を受けて育つてきた新世代が旧来の邦楽とそれに伴奏される舞踊にあきたらしさを感じはじめた時代である。日本の舞踊は洋楽では踊れないといふ固定観念にいどんで、これを打破した一種の実験劇のころみが創設期の宝塚歌劇であった、と高木氏は力説する。洋楽を大胆に取り入れた国民歌劇の創始。それが発足当初のタカラヅカのスローガンであった。昔なつかしい浅草の大正オペレッタはほろびたが、ミュージカルへの途を模索して進んだ宝塚歌劇は六十年の星霜を経た。昭和三年に、高木氏が演出家として芸術祭文部大臣賞を獲得した「華麗なる千拍子」は、のべ数百万の観客を動員したといわれる。驚異的な数字である。

演出家としての高木史朗氏のキャリアは、昭和一五年の処女演出『こども風土記』にまでさかのぼる。柳田国民の民俗祭礼の研究に原案を得、四季折おり、各月ごとの祭と子供のあそびとで綴つた舞台が、高木氏の出世作となつた。童心の世界に深いノスタルジアのみなもとを求めてそれを舞台に再現する。高木氏が制作し、演出する脚本をひとすじにつらぬく独特な主題性は、早くもこの処女作にかたちを現わしていたといつてよいだろう。ひ



“タカラジェンヌに栄光あれ”の90人のラインダンス（昭和37年11月）

みとめる昭和二六年の『河童まつり』では、最近物故した漫画家清水昆氏の原作をもとに、童話的世界と世相風刺とを同時に盛り込むところみなされた。昭和三〇年、武者小路さんの原作になる『人間万歳』。近くは『星』シリーズと銘打たれた昭和四六年の『星の牧場』翌四七年の『蟻の町のマリア』の翻案、『星の降る町』。宝塚歌劇でなければ上演できないもの——それは童話劇であると同時ミュージカルであるのだ。それが高木史朗氏の脚本家・演出家としての信念なのである。ものしづかに語る高木氏のいまなお（失礼！）繊細な美青年のおもさしのただよう風貌には、これまでいくつともなく手がけた舞台の名場面が去来しているようと思われた。

鉄工所の八人兄弟の末っ子として神戸市の兵庫に生まれ、姉たちの女優志願の見果てぬ夢を引きつぐかたちで宝塚入りした高木氏の心には、生まれた土地の風景がいわば精神の原画として深く焼きついている。荒涼とした工場群。濛々たる煙突の連なり。夕日。一日の仕事を終えて家路をたどる職工たち。こうした風物を背景としていやその世界のまつただなかに、不意と現われ出るメルヘンのみずみずしい切り口。童話のかたちでしか現前することのない現代のメタフィジックへの飢渴が、この人物が女ばかりの舞台に織りなす夢の底流にあるとわたしは感する。神戸小学校で上野出の先生たちに音楽と図画の薰陶を受け、また作文にも秀でていたこの多感な——とわたしは想像する——少年は、次いで神戸二中（現兵庫高校）に進んで、厳格な進学教育に身をさらすことになつた。それへの反発が、おそらく同じ神戸二中出身である東山魁夷・小磯良平・竹中郁などの諸氏の場合と同様に、自由奔走さへと高木氏を走らせた。当時はほとんど志望者のなかつた関西学院の哲学科で、氏の最初の友人になったのは前述『星の牧場』の原作者、庄野英二氏である。

何年もスターを育ててこられての経験からいって、大物

はじめてそれとわかるものですか。こんなわたしの質問に對して、高木氏の答えは、センドンはからずも双葉よりかんばしからずということだった。たとえば越路吹雪。予科から本科に上がるとき、彼女が何度も落第しそうになり、特に声楽がからきしだめだったとはまことにもつて愉快な話ではないか。越路吹雪があれほどのシャンソン歌手になるとは思つてみなかつた、というのが高木氏の告白なのだから世間はおもしろい。もう一人の大物スター、八千草薫も成績はビリだつた。『文福茶釜』の主役の故障で、急拠代役に立てたらこれが意外な大当たりとなつたとのこと。事柄は氏の著書『宝塚花物語』にくわしいが、総じていつて平均的によくできる優等生よりも、劣等生の方がおもしろく、将来大物になる可能性が大きいといふ。どこの世界でも事情は似たようなものらしい。

宝塚歌劇団では、毎年四十人から五十人の新入生を採用する。そして引退やら結婚やらの理由で、毎年退団するものがやはり五十人くらいだから、そこにも例の新陳代謝の秘密があるわけである。毎年の新入生の中で目立つのが、からず四、五人はいるとのこと。平均年齢は二五、六歳。退団後は、他の分野で活躍するスターも輩出するが、大多数は結婚して家庭に入るといふのはわたしとしては意外な事実であった。入団者は全員寮生活を送ることになるが、そこの狭ききびしさ、上級生と下級生との序列の厳格さは、すでに定評のあるところである。その寮生活から、一種の学生氣分といふか、ともかく芸能人ではありながら世間はずれせず、さりとて普通のお嬢さんでもないといふ宝塚独特のムードがかた



“スターはファンがつくりあげます”と高木さん（右・自宅にて）

ちづくられることになる。永六輔氏はこれに「精神的綱足」なる名評を下したそながつて、多少は戦後育ちの世代らしく変つてきているといふ。またもうひとつ、いわゆる中流家庭の子女が淳風美俗の德育を父兄に望まれて入団するケースも多くなつてきていること。世上一般の学校に行くよりも礼儀作法が身につくのはうけあいだらうから、退団後にとくと見込まれて結婚してゆくのも故なしとしない。こうなつてくると、この「女の図」はたんなる芸能史上の問題ではなく、まさに社会心理学的な考察の対象でもあるということになるかもしれない。

宝塚歌劇場の舞台にくりひろげられるいくたの華麗なスペクタクルは、江湖の女性たちの夢とあこがれから紡ぎ出された織布である。「宝塚のスターはファンが作りあげる」とは高木史朗氏の名言だが、そこには嘗々六年、日本の女性たちが舞台に投影しつづけてきた甘美なナルシシズムの歴史が刻みこまれている。高木氏の言葉のとおり、スターは自分ひとりでスターになることはできない。彼女たちに熱狂するファンは、自分が人生に賭ける夢、あるいはまたついに満たされなかつた夢の追憶を、スターたちとともに舞台に載せるのである。女たちのナルシシズムの晶化作用。そうはいつても、その千変万化の万華鏡は男たちにとって、女なしでは生きることのできない男といふものにとって、女性存在の不思議な秘密を知るための奈しき夢占である。高木史朗氏は、そうした明るい夜の夢の比類なき造型家であるにほかなら

熊内本社壳店

誕生



\*真心こめたおくりものに\*  
バウムクーヘン・クッキー・各種洋菓子

北欧の銘菓  
**ユーハイム・コンフェクト**

■本社・工場・熊内店 神戸市東灘区熊内町1の8の23(市立美術館東隣) ☎221-1164  
■三宮センター街本店 神戸三宮センター街(洋菓子・喫茶・レストラン) ☎331-2421  
■さんちか店、神戸大丸、そごう・阪急店、三越・元町店、神戸デパート内

MAKE UP WITH ROYAL

ディオール、カルダン、サンローランその他有名デザイナーによる'74年型サングラスとU.S.A.ボシュロム——レイバンサングラスぞくぞく入荷、その他国産サングラスもヨーロッパに負けず劣らずのデザインで多数品揃い。



神戸眼鏡院

元町店・元町3丁目 ☎(321)1212代表

三宮店・さんちかタウン ☎(391)1874~5

元町店は毎水曜日がお休みです

三宮店は第2、第3水曜日がお休みです

津軽三味線

# 高橋竹山

出演／高橋竹山・須藤雲栄・高橋竹与

7月25日(木)

開場／午後6時 開演／午後6時30分  
神戸文化ホール・大ホール

(曲目)

● 第1部

寒撥(かんぱわ) — 高橋竹山物語  
新じょんがら節/津軽三さがり  
三味線じょんがら/津軽竹山節

○ 第2部

津軽の民謡  
じょんがら節/津軽音頭  
よざれ節/ほうたい節  
津軽やま唄/馬子唄  
津軽あいや節/弥三郎節

主催／神戸市

入場料／A席 ¥1,500 B席 ¥1,300 C席 ¥1,000

(市内各プレイガイド、主要レコード店にて発売中)

● プレイガイド

日本楽器神戸店(078)321・1191 大丸神戸店(078)331・8121 葵・板宿・生駒・小田・夙港・沢  
神戸国際会館(078)251・8161 神戸文化ホール(078)351・3535 トミヤ・パマキ・日の出・長田・星電社

垂水プレイガイド(078)706・4821

● 主要レコード店

神戸市生田区楠町4丁目26 ☎078-351-3535

神戸文化ホール

神戸市生田区楠町4丁目26 ☎078-351-3535

# ★神戸の催し物6月ご案内

## 音楽▼

### ★五木ひろしリサイタル

1日(土) ①2時 ②6時半

戸文化大ホール S・二七〇〇円

A・二三〇〇円 B・一八〇〇円

孤独とさすらいのシンガー・アル

バート・ハモンド

4日(火) 6時半 神戸国際会館

A・二五〇〇円 B・二二〇〇円

C・一八〇〇円 曲目／カリフオ

ルニアの青い空、落葉のコンチエ

ルト、世界に平和を、他



アルパー・ハモンド

指揮者ブルゴスは小沢、メータに匹敵するスペインの巨星である。

### ★吉田拓郎リサイタル

21日(金) 6時半 神戸国際会館

A・一八〇〇円 B・一五〇〇円

C・二二〇〇円

バールコンサート「前橋汀子ハイ

オリリリサイタル」

19日(水) 6時半 県民小劇場

八〇〇円

特別演奏会「チエロとピアノのた

めの二重奏の夕べ」

8日(土) 6時半 県民小劇場

八〇〇円

★カーベンターズ

9日(日) 2時半 神戸市立中央

体育館 S・二八〇〇円 A・二

五〇〇円 B・二二〇〇円

都はるみシヨー

10日(月) ②2時 ②6時半

戸文化大ホール 民音会員・一五

〇円 ゲスト／野村真樹

S・一五〇〇円 A・一二〇〇円

### ★歌とピアノとギターによる演奏会

28日(金) 6時半 県民小劇場

前売・六〇〇円 当日・八〇〇円

演劇▼

★バレエ「前橋汀子ハイ

3日(月) 1時半 神戸文化大ホ

ール 無料

★県民公演「きぬといだ道ずれ」

14日(水) 15日(木) 6時半

神戸文化大ホール 無料

★歌舞伎「わらび座公演

15日(土) 6時半 県民小劇場

前売・六〇〇円 当日・七〇〇円

★歌舞伎「轟」

18日(火) 19日(水) 6時半

15分 神戸文化大ホール 無料

★在日朝鮮演劇公演「道」

16日(日) 17日(月) 15分

二二〇〇円 作／秋元松代 出演

／宇野重吉、櫻山文枝、他

★登山映画会

6日(木) 5時半 神戸文化大ホ

ール 無料

★映画会「故郷」「運がよけりや」

7日(金) 6時半 8日(土) 1

時半 神戸文化大ホール 三〇〇

円

★山とスキーの映画会

11日(火) 6時半 神戸文化大ホ

ール 無料

★上月倫子バレエ研究会発表会

16日(日) 4時 神戸文化大ホ

ール 無料「創作バレエ・驚姫」

17日(月) 6時半

神戸文化大ホール 三〇〇

円

★今岡頌子舞踊団公演

21日(金) 6時半 神戸文化大ホ

ール A・二五〇〇円 B・二

〇〇円 演目／「冬の公演」他

★眞松・浜田バレエ公演

22日(土) 6時半 23日(日) 3

時半 神戸文化大ホール 九九〇円

一五〇〇円

★桂春團治一門会

23日(日) 11時

時半 神戸国際会館

一五〇〇円

★花柳五三輔会

26日(水) 6時半 神戸文化大ホ

ール 無料会員・九〇〇円 演

目／春團治「祝のし」春輔／く

しゃみ講歌、他

巨匠ブルメイスティルの感動的名演  
出による幻想とロマンの花咲くチ  
ヤイコフスキイの名作



「白鳥の湖」より第3幕



上月倫子

- ★ブルゴス指揮／幻想交響曲  
14日(金) 7時 神戸国際会館  
民音会員・一六〇〇円 一般  
A・二二〇〇円 B・一七〇〇円  
音楽祭／大阪フィルハーモニー交  
響楽団 曲目／ベルリオーズ・幻  
想交響曲、ファリア、バレエ組曲  
曲「三角帽子」第1・2組曲、他  
曲「三角帽子」第1・2組曲、他

▲吉田 拓郎



## 神戸のアーバンデザイン

### 『新旧比較シリーズ』

(4)

材料選定をした道づくりを

水谷頴介+チーム・UR

(8)



▲元町一番街



▲センター街

●人間が足で歩いていっての交流、人間と人間のコミュニケーションの蓄積こそ、都市の成り立ちの基本であるとしたら、交わりと蓄積が可能な「道」こそ、都市に欠くことの出来ないもの、ということになります。

●人間が足で踏みかためた土の道、長い時間で擦り磨いてきた石敷の道、足跡が堀りこまれてしまったように見えるレンガ道、などです。アスファルトの道路のように常に人間の足の歴史が消されおいかぶされてしまうことの実績が都市のコミュニケーションを足から自動車へ、電話へ、テレビへと動かしてきてしまったといえます。歩き、立止り、お喋りをし、ある時には坐り込みたくなる。また自分の手仕事をみんなに关心をもってもらう露店をひろげたくなることからはじまって、そんな人間の仕草が長い長い時間にわたってくりひろげられるべき「道」、町のあちこちに残っているそんな路を大切にしなければいけませんし、また、町の心の中心につくっていかなければならないでしょう。

●道づくりは、まず、歩くことの歴史を支えてくれる材料選定からはじまります。装飾や展示は、それが得られたあとでいいのです。もちろん、人間自身が一番美しく見えることを考えてのことと、道路が主役ではないことを忘れないで。

(水谷 頴介)

神戸のモダーニリビング  
アトリエハウス派の画家の場合  
水谷 頴介+チーム・UR  
《新しい町屋》  
⑥ ⑦

●お家で仕事をする人の典型として、画家があります。アトリエをもったすまいです。洋画系の人は自分一人で描くこと以外はないと思いますが、日本画系の人は、模写の仕事などがあると、沢山の人々と一緒に作業をやることになり、アトリエは大作業場となります。画家とほぼ同類、彫刻家などは、アトリエは町工場です。金属を扱うと切断、溶接、研磨の鉄工所です。

●お家で仕事をするということになると、生活のリズムは一般的の勤め人の方とは、いろいろ変わってきます。住宅としての道具だけ、飾りつけも、在宅時間の長さに比例して手がこんできます。題材に関連した大道具・小道具が家中あふれ出してくるといったことももちろんです。仕事が家だから食事もすべて家でといったケースと、逆に、一日中家だから、食事ぐらいはいつも外へ出てといった習慣になってしまう人がいます。食事がすべて家でということにつれて、家事の素材、適当な野菜づくりぐらいは、お庭でといったことになる場合もしばしばです。

●お家で仕事をする人の都市観、人生観と、勤め人のそれは対比的であります。勤め人は労働の場が都心を構成する会社都市像、すまいはねぐらか逃避、マイホームの場に対して、アトリエハウス派は、都市の中心は住宅、人間の精神・能力・文化はマイアトリエにあり、それら相互の交流の場を都市に求めます。脱サラリーマンのスタートはマイホームからマイアトリエの希求からということになるのではないでしょうか。（水谷 頴介）



▲中西勝画伯の住居とアトリエの全景



▲アトリエ



▲新住居のリビングルーム 中西夫妻とお客の赤尾兜子さん



☆神戸を福祉の町に(6) 上のマークは車イスで使用できる箇所にはられる国際シンボルマークです。

## 橋本 明 教科書の中の精薄問題

今の社会では心身障害者、とりわけ智恵遅れといわれる人たちへの誤解、偏見、差別はいたるところに根強く残っている。古今東西の謬のなかにも智恵遅れと思われる人たちを嘲弄する表現がみられるし、新聞や雑誌、あるいは私達のフとした何気ない言葉のなかに心身障害者を差別するような言い方をしているようなことがしばしばある。こういった誤解や偏見は私達が生まれ育つていぐ環境の中でしらずしらずのうちに植えつけられ、先入観念として頭の中に入りこんでしまっていることが多い。

ところでこうした誤った先入観念が学校教育の中で生徒たちに与えられ、教えられているとしたらこれほど危険なことはない。そこで、学校で使用されている教科書の中でも、精神薄弱がどういうふうに扱かされているかを調査した結果があるのでそれをながめてみたい。

神戸に本部

を置いて、精神薄弱に対する啓蒙運動を

展開している

「誕生日あり

がとう運動」

では、昭和46

年に文部省検

定済で各教育

委員会での採

択のために展

示されている

教科書を調査した「誕生日ありがとう運動」の機関紙



教科書を調査した「誕生日ありがとう運動」の機関紙

保健体育の教科書を中学校一二冊、高校十一冊についてその実態調査をしたところ、精神薄弱に関する誤った記述や表現がずいぶんなされていることがわかった。

たとえばその中のいくつかをひろってみると、「遺伝によるものが多いが、まれには生まれてからの中に外傷、脳炎、脳膜炎などによって起ることもある」――

高校・数学社。このように精神薄弱の発生原因として遺伝が大きな割合を占めるかのように表現されている教科書が多い。精神薄弱=遺伝という誤った考え方は「血すじ」と受けとられ、精神薄弱児(者)をもつ家族は世間から

冷たい眼で見られ、肩見の狭い、やりきれない気持で暮さざるを得なくなる。ましてや口に出したり、人前に連れて出るということはどうしてもつい避けるようになってしまう。医学の進歩は、精神薄弱の原因は多種多様であり、遺伝はほんのごく一部にすぎないことを明らかにしてきたが、学校教育に使用されている教科書に今だ遺伝を強調する記述がみられるのはもつての他である。

次に、精神薄弱の人格についてみると、

「いわゆる低能といわれるものである」――高校・数学社。「精神薄弱は低能といわれるものであるが、たんに知能が低いだけでなく、知、情、意のいずれの面でも発達がおくれ不完全な状態である」――高校・大原出版。

「パーソナリティ全体も普通の人とはちがっている。精神薄弱者の中には絵を描くのがうまかったり、おどろくほど記憶力がよかつたりするものがあり、白痴天才とよばれている」――高校・一橋出版。

「教育と訓練によつて、成人になつて半人前位の仕事はできる」――高校・大原出版。

こうした誤った記述や不適切な言葉の使い方は、精神薄弱を一人の人格をもつた人間というよりも何か一段と劣つた人間、価値の低い人間として劣等視する見方を助長することになりかねない。

また「白痴は人のことばを理解することができず、自分の意志の発表も困難である。痴愚は成人になつても精神年齢が六一七歳にしか達しないものである。したがつてこの両者はほとんど義務教育が受けられない」——高校・教学社。といったふうに教育を受ける権利を否定するような記述も見られる。

このように、ほとんどの教科書に大同小異、精神薄弱についての誤った記述や、もはや歐米では使われていな「昔前の語句が今だに見られ、それが今まで指摘されずにそのまま生徒に教えられてきた」ということは、大変危険なことであり、このような教科書の執筆者、検定の問題が早急に検討され、正しい内容に改訂されなければならぬことはもちろんあるが、根本的には障害児に対する教育の姿勢を根底から変えていくことが何よりも大切であろう。

### 教科書の例「新訂高校保健体育」教育出版発行

3 精神薄弱 いわゆる低能といわれるものである。単に知能が低いだけでなく、知・情・意のいずれの面でも発達が遅れ、不完全な状態を示す。原因には、遺伝、母体内での梅毒の感染、出産時の脳損傷、内分泌異常、生後の脳疾患や頭部外傷などがある。

(1) 白痴 ほとんど言語も理解できず、したがって他の意志の交換および環境への適応も困難である。衣食についても、たえず保護を必要とし成人後も自立が困難である。知能指数※(P153参照)による分類によれば、25-20以下のものがある。

(2) 痴愚 新しい事態に適応する能力が乏しく、他人の助けにより、ようやく自己の身辺のことからを処理することができる。しかし、成人後も精神年齢(P155参照)は6、7歳にしか達しない。知能指数20-25から50程度のものである。

(3) 魁鈍 日常生活にさしつかえない程度にみずから身辺のことからを処理することができるが、抽象的な思考・推理が困難である。成人後も精神年齢は10-12歳程度にしか達しない。知能指数は50-75程度である。

この教科書問題は昨年四月の参議院社会労働委員会でとりあげられ、八月に文部省は教科書発行15社に対し、精神薄弱、精神病に関する記述内容の改善を要望し、高校で使用する教科書は48年度のものから改訂されるようになつたが、中学で使用されている教科書はまだ以前のままである。

この4月にも神戸市内の中学校で使われている保健体育の教科書(講談社発行の「標準中学校保健体育」)の中に「これ(精神薄弱)は……中略……生まれつきによることが多いが……」という記述をされているのが摘され神戸市教育委員会はさつそく特殊教育課に問題となる部分のチェックを指示し、市立中学校に教科書通り教えないよう異例の指導通達を出している。

三年間教科書問題に取り組んできた「誕生日ありがとう運動」を主宰している藤本隆さんは「調べてみると予想以上に内容が悪かったです。『主として遺伝によることが多いが……』という表現や『人格的におかしい』といった表現が使われているには驚きました。遺伝が少ないことを強調するのがこの『誕生日ありがとう運動』のねらいなのに……。アンケートを寄せていただいた人達からは結構現場の先生によく理解してもらいたい、という意見が多かったですね」

ともかく、中学、高校といった学校教育の中で最も大切な時期に、しかももつとも多感な年頃の生徒たちに偏見や差別を植え付けるような教育が長い間にわたって行なわれてきたことは恐ろしいことであるが、今までそれが当たり前のこととして受けとられ、考えられてきたところに、身障者を差別し、特別視する日本の社会福祉の感覚や姿勢がみられるような思いがする。偏見をまったくなくしてしまうことは不可能に近いことかもしれないが、少なくとも、誤った見方や考え方をなくし、正しい理解をもつことは福祉社会づくりの根底をなすものであるだけに、適切な教育や正しい知識、情報の提供を強く望みたい。

刀劍 古美術  
書画 骨董



19世紀

フランス製ランプ

¥ 135,000

鑑定 買入  
研白鞘 拙御承処

神戸市生田区元町通6丁目25番地

刀  
古  
骨

美  
術  
董

元町美術

〒650

TEL 078-351-0081



きものと細貨  
ちんざら庵

神戸

西店/三宮センター街・電話 331-8836(代)

東店/三宮センター街・電話 331-0629

三宮店/さんちかタウン・電話 391-4303

東京

銀座コア店/4階着物コア・電話573-5298(代)

渋谷東急店/5階和装名家街・電話462-3409(直)

日本橋東急店/4階和装名家街・電話211-0511(代)

(内線294)

池袋パルコ店/4階着物小路・電話987-0561(直)

## スピーディなシステム

●6月のレポーター藤谷 明正 ▲藤谷明正デザイン事務所

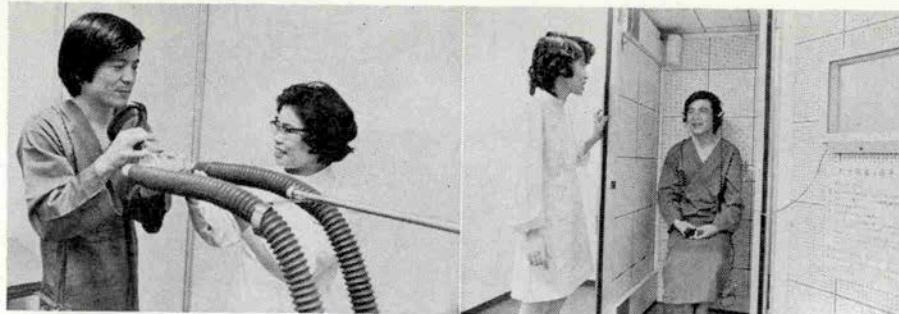
「気軽に成人病健診を」と、兵庫県下ではじめてのコンピューターによる健康診断センターが、神戸市長田区丸山町3、丸山病院(三木徹院長)に昨年五月に完成。

ここ一週間くらいは、仕事のほかにある影刻展のための制作に追われ身体は睡眠不足と過労気味。しかし気持としては作品が完成した満足感があり健康的です。昔から健康について快眠・快食・快便と申します。どれも爽快なことですが、それが全てといえば大変物足りなくて僕の人生はウンチしか残らないという情ない気持になります。

やはり精神・肉体のバランスが健康ということになるのでしょうか……

一度の検診もうけず不規則で時には異常に多忙な生活を送っていると潜在的に気持が病にとりつかれていくようです。やはり人間は弱いもの、そんな折に小泉さんに「診てもらわへん」と言いました。白亜の美しい建物、ニフロアに亘るさまざまな最新設備、看護婦さんの行きとどいた進行とスピーディなシステムなど大変好印象です。結果は胃下垂の注意を受けただけでその他の障害はなく、短時間で大いなる安心を得ることが出来ました。見えざる敵に脅えていらっしゃる方は是非どうぞ。

健診は、血液、尿の検査。胸部X線、胃部X線。身長、体重、視力、血圧、眼圧の測定。心電図、心拍数解析、聴力、肺機能、眼底検査など六十六項目が全部自動的に進められ、コンピューターによつて二日かかったものが三時間です。費用は二万八千円(三十五歳以上の人)はぜひ年に一度うけましょう」と呼びかけています。



肺機能の検査

聴力検査をうける藤谷さん

## 丸山病院 健診センター

神戸市長田区丸山町3丁目20

TEL 神戸078(642)1131(代)

午前9時~午後5時

神戸遊戯誌 128

## ★神戸こそ近代遊戯発祥の地

ついこの間から始めたという気がするのに、このシリーズがはや正味十年八ヵ月つづいたのだから月日のたつのは早いものである。だが、振り返つてみるとその間昔のスポーツの思い出と今日までの歩みの取材にずいぶん苦労したという気もするし、「神戸っ子」の各記者諸兄はじめスポーツや趣味部門の各界の人々からえらいご援助とご教示をいただいたという感謝の気持ちがしみじみする。とにかくこれで神戸遊戯誌も一応ケリがつけられたわけでいささか肩の荷がおりたという感じと共に、今まで書いた文章の中に思わぬまちがいもかなりあつたのではないかという気がかりもしないわけではない。それはまあ今後の各方面の関係者からのご教示で訂正させていただくこととして、これでまあ神戸遊戯誌の一本の

骨組みだけは作ることができたといふ満足感を私自身が味わっていることを読者諸氏にも知つていただきたい気がする。



写真は神戸の各種近代スポーツの発祥の地である古き日の東遊園地グラウンドでの野球風景。向かって左側の長い赤レンガ塀の向こう側には今は外人劇場があった。右側の建て物の所に現在神戸市役所が建てられている。元居留地だけにこのグラウンドに接してテニスコートもあったが、ほとんど専用だった。だが、東遊園地グラウンドの方はその後少しだいに日本人にも解放され、野球やサッカー、ラグビーなどが盛んにプレイされた。

この野球風景は、大正11年神戸又新（ゆうしん）日報社主催扇港野球大会の神港商業対県立商業の優勝戦——応援団の学生の持つ長いメガフロンタリーや観衆のカンカン帽が昔なつかしい。〈写真は荒尾親成氏提供〉

〈写真は荒尾親成氏提供〉

一九一一年神戸市生まれ。関西大学英文学科卒。敗戦後神戸新聞社入社。同記者時代「青春戸新聞」で小畠良平画評欄「兵庫のやきもの」などを著書あり。現在日本美術評論家会員。白鶴美術館勤務。又、家連盟会員。ボーット愛好家であり、美術関係記事のほかにスポーツ関係記事やスポーツ報道なども執筆。本誌では「神戸遊戯社」シリーズのほか、かつてデーラースボーツに「スポーツ」を連載したことあり。

筆者紹介



## エピローグ① 青木重雄

カンフットボール、ヨガ、ハンドボール、ホッケー、ハンドボール（四壁）の五十一種である。この他にもれているものがあることは事実だが、それらは他日の機会のことにしてみたいと考えている。

次に以上を通じて私自身が改めて驚いたのは、想像以上に多くのスポーツや娯楽がわが神戸を発祥の地にしていることである。このシリーズを読んでいただいた方々もこのことは同感されたと思うが、とりわけ今日の若い人々に、このかつてのコウベ（兵庫県も含むが）の日本遊戯史上に占める特異な功績を知つてもらいたい気がする。全く日本のモダンな遊戯は神戸と東京・横浜から発生した——といつても過言ではない。

だれでも知つておられるが、今日隆盛をきわめているゴルフの始まりは一九〇三年（明治三六年）五月の六甲ゴルフ場の開設以来である。六甲山開祖の英人A・H・ゲルーム氏と服部県知事はじめ諸名士臨席のもとに山上での近代的スポーツの幕が切つて落とされたわけだ。つづいてビリヤード、ヨット、硬式テニス、登山と裏山登山、馬術、水泳（近代泳法）、ダンス（社交ダンス）、バレーボール、キャンピング、高校（昔は中等学校）野球、マラソン、投輪（戦前は輪投げの名前）、ハンドボール、ハンドボール（四壁）の十七種はあきらかに欧米からまず神戸に移入されて日本人によつて学ばれ、スタートしたものである（もちろんなかには京浜地区と前後して移入されたスポーツや娯楽もあるが）。とにかく明治、大正、昭和初期を通じてコウベこそは近代遊戯の発祥の地だったわけだが、このことは今日のよう空港が発達せず、世界への玄関が海港のみであった時代の当然の産物であつたといえよう。

次にわが国で開始された年度や神戸および県下のおもな優秀団体について書くと、五十一種目のうち戦後派に属るのはダーツ、ボーガン、ボーリング、アクアラング、ハンドボール（四壁）の五種と戦前もごく一部で行わされたことはあるが、実際には戦後になつて初めて流行

したアーチエリー、バドミントン、空手の三種である。さらに優秀団体ではなんといつても関学大が戦前、戦後に群を抜いている。前にあげた多くのスポーツのほとんどが同大学でチームづくりされているし、成績も優秀である。なかでもテニス（硬・軟）、サッカー、相撲、柔道、ラグビー、バレー、卓球、アメリカン・フットボール、カヌーなどは独壇場であった感さえする。その他大抵のスポーツに関学チームの顔がぞろっている。まさに県下の、いや全関西の“スポーツ王国”といふ気がする。神戸商大（旧神戸高商）の活躍も見のがせない。関学には及ばぬが、初期にはラグビー、バレー、硬式テニス、ボート（競走用）で全国的な功績を残している。ボートだけはさすがに関学チームも神高商に歯が立たなかつた。高校（旧中等学校）では野球の神戸一、二中、関学、第一神港商、県商、明中、報徳高、芦屋高、サッカーの神戸一、二中、御影師範、甲陽、スケートの甲南高女、硬式テニスの松陰高女、バレー、ボートの姫路高女、器械体操の神戸二中、野田高女、柔道の御影、甲陽、報徳などの活躍が断然光っている。

神戸に神戸外人クラブ（K R A C）があつたことが日本人に大きな影響を与えたことはいうまでもない。その意味で初期に同クラブが専用した元居留地の東遊園地グランドとテニスコート、それに脇浜のヨットハーバーと海水プール、六甲ゴルフリンクスなどは神戸人として今後共忘れられてはならぬ歴史的な場所といえるだろう。その他日本人の手による施設では、西代市民運動場、甲子園野球場、浜甲子園テニスコート、聚楽館スケートリンク、青谷の神戸乗馬クラブ場、武徳殿、Y M C A 体育館、裏山の各茶屋のビンボン台などがあげられる。最後に実業団では各種スポーツを通じて神鋼、川鉄、ダンロップ、広畑日鉄、県教育チーム、県警等の活躍が特に銘記されよう。（四九・四・二三記）